

第1分科会③-5

「食べて、食べて」はもうやめよう

食事量の低下

職員のストレス

無理のない経口摂取

岐阜県多治見市

特別養護老人ホーム エバーグリーン

介護職 やまだかほ
山田香穂

佐賀健一

銀杏・拳ユニット職員

Egreenjimusho1@aroma.ocn.ne.jp

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

当施設、特別養護老人ホーム エバーグリーンは、岐阜県多治見市にあります。
施設定員100床。うち、ショートステイ10床のユニット型特養。
平成26年より、地域密着型特別養護老人ホーム29床を開設。

＜取り組んだ課題＞

私達のユニットには、認知症の影響と身体機能の低下から食事が進まないご利用者様が多くいたが、全量摂取が当たり前という雰囲気があったため、食べさせないといけなく、食べてくれないと次の介助に進めないというストレスを感じていた。そのため、「食べて、食べて」と言いながら無理に食事をすすめていたが、ご利用者様の年齢や体力を考えると、全量摂取や栄養バランスを重視する必要があるのかという思いも感じていた。そこで私達は、無理なく経口摂取を維持できないか取り組む事にした。

＜具体的な取り組み＞

【事例1 A様】

- *要介護度5 取り組み開始時の年齢95歳
- *取り組み開始時の食事形態
主食：軟飯 副食：極刻み
栄養補助飲料（ラコール）を併用
- *咀嚼や嚥下機能面ではなく嗜好面に問題があり、食事摂取量が極端に少なく痩せていた。無理せず食事摂取量が増やせないか、施設から提供される食事にこだわらず、ご家族様の協力のもと、好きなものだけ食べてもらおうと食事の内容を見直した。

【事例2 B様】

- *要介護度5 取り組み開始時の年齢91歳
- *取り組み開始時の食事形態
主食：軟飯 副食：極刻み
- *咀嚼や嚥下機能面に問題があったが、重度の認知症のため機能改善のアプローチが困難で、食事介助の拒否もあった。そんな中、体調不良により認知症の進行と意欲低下がみられ、食事が摂れず体重が激減したため、食事形態と食事内容の見直しと、ご自分で食べて頂ける方法はないか模索した。

＜活動の成果と評価＞

A様は、ご家族様相談のうえ施設からの食事を中止。栄養バランス等にこだわらず、A様の好きな物だけを提供し始めたところ、食事摂取量、体重共に増加。元気も出てくるなど良い結果になった。しかし、更に老衰が進み、食事量は変わらなかったが、徐々に体重は減っていった。B様は、食事形態の見直しだけではうまくいかず、食事内容も見直すことで食事量も体重も増加し、自分でも食べて頂けるようになった。しかしユニット内では、まだ食べさせなくては行けないと過剰な介助が続いていた。そんな中、毎年行っている施設内研修で、看取りケアについて学ぶ機会があり、「食べても体重が減っていくことは、栄養として吸収する事ができず、自然に最期を迎える準備段階に入っている」ということを知った。A様は、十分なカロリーは摂れていたが体重が減少していったため、最期を迎えるために身体がその準備段階に入っていると感じ、無理強いする事はなくなった。B様は、摂取カロリーも体重も維持できていたため、無理強いすることなく食べて頂ける工夫がまだ必要と感じ、食べて頂けたときの声かけや、介助方法、気づきを皆で共有し実践することで無理強いすることなく食べて頂けている。

＜今後の課題＞

ご家族様の中には、老衰が進み食べる意欲が低下し、食事を摂ることが苦痛にさえなっているご利用者様の事が理解できない。自分の家族が老いていくことを、すぐに受け入れることができない方もみえます。そのようなご家族様に、どのように向き合っていくのが今後の課題である。